

体育科の特質に応じた深い学びを実現する学習指導

—小学校段階における体育の見方・考え方を働かせた学習指導の在り方の検討—

當 房 省 吾 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

池 田 克 則 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Learning guidance in the Physical Educational Department to realize deeper learning

TOUBOU Shogo・IKEDA Katsunori

キーワード：体育の特質に応じた深い学び、体育の見方・考え方、学習問題設定、単元づくり

1. はじめに

平成28年12月21日に中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下「答申」）が出された。その中で各教科等の学習指導の在り方について、次のように示されている。

- 今回の改訂においては、全ての教科等について、この力はこの教科等においてこそ身に付くのだといった、各教科等を学ぶ本質的な意義を捉え直す議論が展開され、各教科等において育成を目指す資質・能力が三つの柱に基づき整理された。
- 学びの質を高めていくためには、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、日々の授業を改善してつための視点を共有し、授業改善に向けた取組を活性化していくことが重要である。

また、平成28年8月に出された中央教育審議会教育課程企画特別部会の体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループにおける審議の取りまとめの中には、次のように示されている。

- 各教科等においては、育成を目指す資質・能力を三つの柱（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）で明確化し、深い学びにつなげていくことが求められる。その際、各教科等の特質に応じて育まれる「見方・考え方」が重要とされている。

これらを基に、次期学習指導要領では、教科の目標が以下のように改善された。

- 体育や保健や見方・考え方を働かせて、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

そこで、本研究では、次期学習指導要領が目指す「体育の見方・考え方を働かせた」学習過程やそれらの過程を通して三つの資質・能力をバランスよく育むための学習指導の在り方について、教科を学ぶ意義を踏まえながら検証するものである。

2. 体育の特質に応じた深い学び

2.1. 体育科の特質に応じた見方・考え方とは

体育科の学習においては、「できるようになりたい」「もっと体を動かしたい」といった思いや願いをもち、課題を解決する中で「わかる」「できる」「かかわる」が一体となった深い学びを展開していくことを通して、運動に親しむ資質・能力をバランス良く育むことができる。そのような学習を実現するためには、体育科の特質に応じた見方・考え方を働かせた学びを展開していく必要がある。なぜなら、他者とかがわりながら自分の課題を解決していく際には、運動ができるためのポイントがわかり、わかるだけでなく、わかったことを基に試行錯誤を重ねてできるようになっていく過程が大切である。そして、その過程においては、自分の課題や解決の見通しを明確に捉える視点や考え方が必要となるからである。そうした学びを繰り返していくことが、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現することにつながる。

そこで、「わかる」「できる」「かかわる」が一体となった学びにしていけるためには、課題を捉える際や解決の見通しをもつ際に、運動の特性やスポーツの価値の側面に着目して運動を捉える視点をもたせることで、「何が課題か」「そのためにどんなことを解決すればいいか」といった課題や解決の見通しをより明確にもたせることができ、問題意識を持続させ、自らの課題に応じた場や練習等を工夫したり、選択したりしながら試行錯誤を重ねていくことができると考えた。

文部科学省中央教育審議会体育・保健体育ワーキンググループ（以下、体育・保健体育WG）では、「体育の見方・考え方」を以下のように定義している。

運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること

この「体育の見方・考え方」は、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえて作成されており、将来的に自分が運動やスポーツとどのようにかかわるかを判断・選択していく際に大きく発揮されていくものだと捉える。このような「体育の見方・考え方」にまで広げていくためには、小学校の段階では、運動の特性やスポーツの価値の側面に着目して運動を捉える視点をもたせ、試行錯誤しながら課題を解決する学びを通して運動をする楽しさや喜びを十分味わわせることが不可欠であると考えた。そこで、体育科の学習における発達の段階のまとめやこれまでの研究等を基に、小学校段階における体育の見方・考え方を「体育科の特質に応じた見方・考え方（小学校段階）」として以下のように整理した。

【体育科の特質に応じた見方・考え方（小学校段階）】

○ 「わかる」「できる」「かかわる」楽しさや喜びを味わうための課題把握・解決の視点

- ・ 運動の特性の側面・・・タイミング、力の入れ具合、方向、位置、姿勢

（※本校研究の成果から）

- ・ スポーツの価値の側面・・・公正、協力、責任、安全

（※体育・保健体育WG審議のまとめから）

○ 視点によって捉えた課題等から解決するための考えをもつ（思考の枠組み）

- ・ 目指す動きと課題となる動きとを比較する。
- ・ 課題を基に解決するための方法を選ぶ・工夫する。
- ・ これまでの自分と成長した自分とを比較し、成長したこととその要因を関係付ける。

2.2. 体育科の特質に応じた深い学びとは

以上のことを踏まえ、体育科の特質に応じた深い学びを、以下のように捉える。

思いや願いをもち、体育科の特質に応じた見方・考え方を働かせ、自分の課題把握や課題解決のために活動を選択したり工夫したりするなどの試行錯誤を繰り返し、友達とかかわりながら「わかる」「できる」を往還して運動する楽しさや喜びを味わう学びの過程

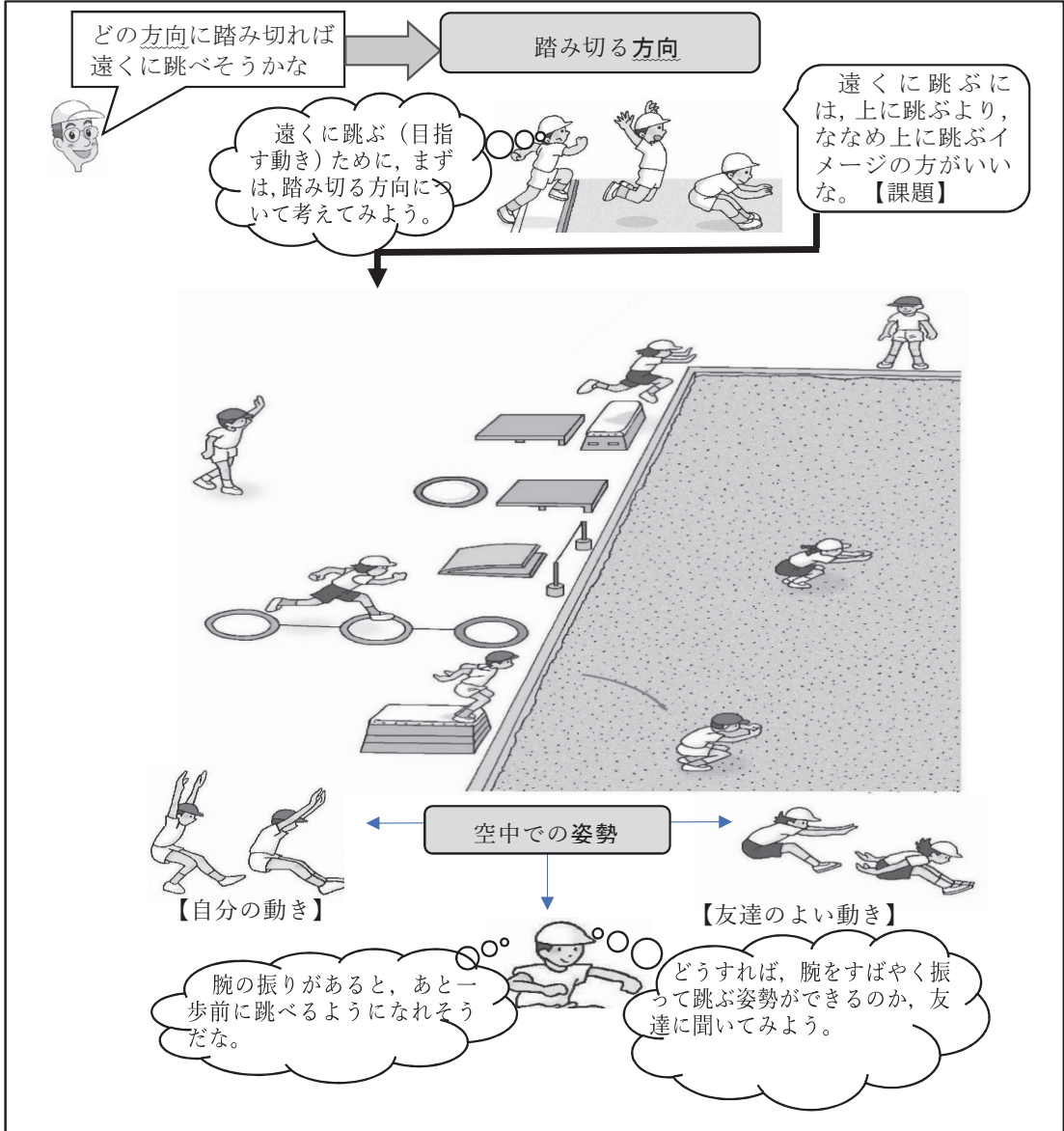


図1 見方・考え方を働かせた深い学びをする子どもの姿

例えば、図1のように、走り幅跳びの動きの課題をつかむ場面で、子どもが「方向」の視点で目指す動きと自身の動きを比較しながら、より遠くに跳ぶために、踏み切った後の跳び出す方向が「前」がいいか、「ななめ上」か、など思考し、より明確に自身の課題をつかむことができる。自身の課題を明確につかむことができた子どもは、課題を解決するためにさまざまな工夫をし始める。「ななめ上に跳び出す」という課題をもった子どもは、様々な場からゴムの高さを跳び越す場を選択できるだろう。さらに、跳び出しがうまくできるようになったら、「もっとやってみたい」「もっとできるようになりたい」という思いや願いを連続・発展させ、次は空中での「姿勢」の視点で、

自身の改善点を見付けたり、友達に助言を求めたりするようになるだろう。

このように、体育科の特質に応じた見方・考え方を働かせていくことで、子どもたちは自分やチームの課題や課題を解決するための見通しをより明確につかむことができる。そして、課題や解決のための見通しをより明確につかむことで、問題意識が持続し、動きを捉えるための思考が活発になったり、自分の課題とつながった解決の方法を選択・工夫したりすることができるようになる。また、目指す動きや自分・友達の動きのよさが分かり、そのよさを認めたり、お互いにアドバイスやサポートをしたりするなどかわり合いながら試行錯誤を重ね、「わかる」「できる」「かかわる」が一体となった学びになり、その結果、三つの柱の資質・能力をバランスよく育むことができる。

3. 体育科の特質に応じた深い学びを実現する学習指導のポイント

3.1. 運動素材のおもしろさや魅力を問い直す教材解釈の基本的な考え方

体育の特質に応じた見方・考え方を働かせて深い学びにしていくために、子どもたちが「もっとやってみよう」「もっとよくしていきたい」と思いや願いをもち続けながら試行錯誤し、自己の課題を解決していくことが必要である。子どもがそのような学びを展開していくためには、はじめに、教師が学習の対象となる運動の本質的なおもしろさや魅力を咀嚼し、子どもたちをそのおもしろさや魅力に誘い込むことができるような運動教材の設定が求められる。そして、次に、設定した運動教材を基に子どもの問題意識を焦点化する問題の設定が必要である。

運動教材の設定においては、まず、「その運動の一番のおもしろさは何か」「子どもたちは、その運動を通してどんな願いや思いを充足させたいのか」といった教師の運動素材に対する解釈を豊かにしていくことが大切である。運動素材に対する解釈を豊かにするために、次の2点を考慮しながら素材の運動遊びやスポーツが元来もつおもしろさや魅力を捉え直す必要があると考えた。

- ①その運動を達成するとき、どんな壁を突破する（課題を解決する）ことがおもしろいのか
- ②その運動は、その発達段階の子どもたちのどんな欲求を充足させるのか

第6学年の「ハードル走」では、以下のような道筋で、素材の解釈から運動教材の設定を行った。

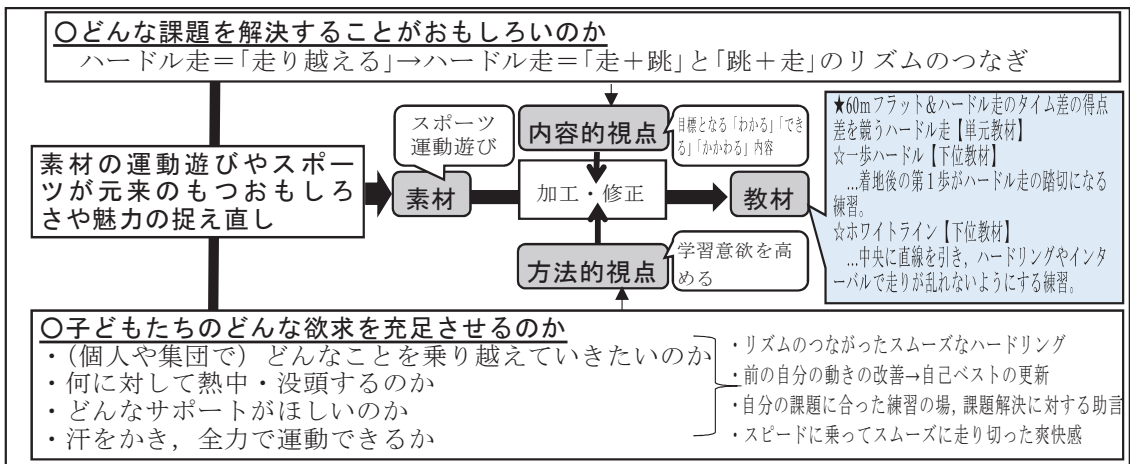


図2 運動素材の解釈から運動教材設定までの道筋（ハードル走）

3.2. 問題設定の基本的な考え方

運動教材を設定できれば、次に、子どもたちに学びの状況に即して問題意識を焦点化して学習問題を設定する必要がある。その際には、「今、ここ」での学びの状況（子どもたちが獲得してきた知識や技能や多くの子どもがつまづいている局面の動きなど）を教師が事前に評価し、本時で焦点化したい課題を見通し、子どもたち自身の感じている課題を整理したり、教師が学ばせたい内容とすり合わせたりしながら本時で一番解決したい学習の問題へと練り上げていく。

そのような学習問題を設定していくためには、教師と子どもが共に体育科の特質に応じた見方・考え方を働かせながら課題を基に整理していくことが肝要である。例えば、第2学年「ボール運び鬼

遊び」の学習で、第1学年の学びから、「空いている場所がわかれば走り抜けることができる」という知識を生かしてすり抜けようとする。しかし、鬼の側もタグをとる動きがだんだん上手になってきた際には、空いている場所がわかってもうまくすり抜けることができないこともある。そこで、教師は子どもと対話をしながら、「何が一番困っているのか」「どうしてそのことが困ることになると考えているのか」と問いかけ、「空いている場所が見えてもすぐに鬼が動いてくるから」「空いたと思ってもすぐに鬼が寄ってくる」など課題を整理する。つまり、教師が子どもと対話しながら「いま、ここ」の状況において何が一番の課題なのかを焦点化したり、どんな特徴をもつ課題なのか類型化したりすることで、課題解決の必要感をもたせる働きかけを行う。

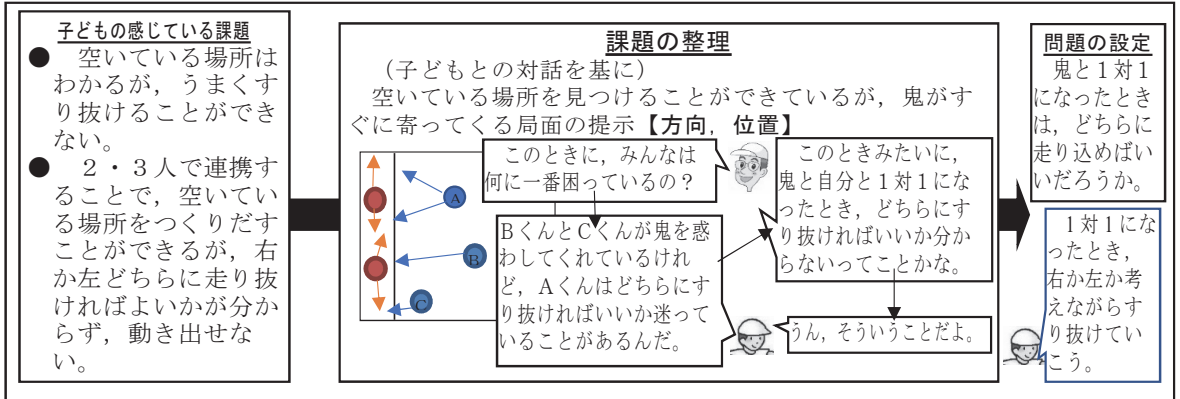


図3 1単位時間における問題設定までの道筋例（第2学年：ボール運び鬼遊び）

4. 思いや願いが連続・発展していく単元づくり

子どもの「もっとやってみたい」「もっとできるようになりたい」という思いや願いを連続・発展させていくために、以下の視点で単元をつくるのが大切である。

- ① 全員が思いや願いを共有することができる学習のめあて（単元のめあて）の設定
- ② 「わかる」学習場面と「できる」学習場面のバランスを図ること
- ③ 自他の成長を実感させる振り返り

①については、運動との合わせ方について、特に子どもの思いや願いを基に、クラス全員がその思いや願いを共有しながら進めることができるような学習のめあてを設定する。その際、以下の例のように、試しの運動から出てきた子どもの思いや願いを基にしながら、全員が単元を学び終えた時に、運動の特性の側面だけでなく、スポーツの価値の側面からも楽しさや喜びを味わうことができる単元全体の学習のめあてを設定する。

【6年生 ネット型 学習のめあての例】①

- チームの中でベストプレイヤー（ベストアタッカー、ベストバサー、ベストレシーバー、ベストフェアプレイヤーなど【ネット型の特性…3段攻撃の役割】）を見つけていこう。【参加、協力…スポーツの価値の側面】
- みんなが楽しい、みんなのよさが生きるゲームをつくろう。【公正、責任…スポーツの価値の側面】

②について、動きを高めるためには、「できる」「わかる」「かかわる」が有機的に関連し合わなければならない。しかし、1単位時間でそれらのバランスを図るのは難しい。そこで、図5のように、まずは「わかる」学習場面に時間を取り、子どもが課題解決の方法（コツや戦術など）を「わかる」ことを保障する。その後、「わかる」だけでなく、「できる」「できてわかる」につなげるために、「できる」学習場面に多く時間を取り、技能や戦術などを高めるようにする。

1	2	3以降			最終時 大会
オリエンテーション	試しのゲーム	コツの発見→作戦の工夫			大会運営を 自分たちで
・教材との 出合わせ ・準備、後 片付け	・ルールの なじませ ・学習のめ あて	課題① 主に【わ かる】を 中心に	主に【で きる】を 中心に	課題② 主に【わ かる】を 中心に	

図4 主にわかる学習場面と主にできる学習場面のバランスを図った学習過程

③については、自分の変容を以下の視点で振り返る必要がある。

自分の中の何が（動き、気持ち、考え）が何によって（友達の助言、練習方法など）によって変化したか

上記の視点で振り返ったことを、「感想マップ」や「体育日記」などで蓄積していくことで、単元全体を通しての変容をつかみやすくなり、成長の実感につながりやすいと考える。

5. 実践 第4学年 単元 ゴール型ゲーム（フロアフット）

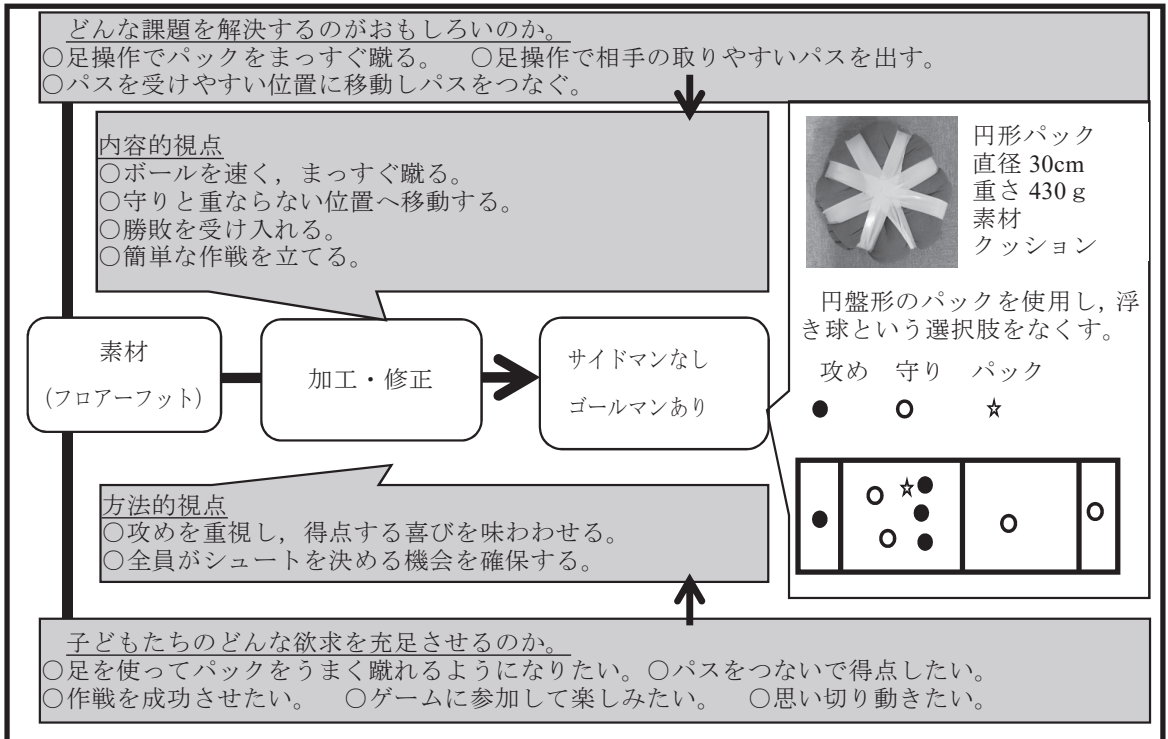
5.1. 実践の基本的な立場

体育科の特質に応じた深い学びの具体化に迫るために、次のような視点に基づいて検証する。

- 運動素材に対する解釈を豊かにすることで、課題解決のおもしろさや子どもたちの欲求充足につながったか。
- 「わかる」学習場面と「できる」学習場面を学習過程に位置付けることで、子どもたちの思いや願いを発展させることができたか。
- 子どもたちの学びの状況に即して問題意識を焦点化することで、子どもたちの問題意識を持続させることにつながったか。

5.2. 本単元における教材設定

第4学年「ゴール型ゲーム（フロアフット）」では、以下のような道筋で、運動素材の解釈から運動教材の設定を行った。



5.3. 単元の指導計画 ([] 思い・願い □ 中核となる学習課題 ■ 「わかる」学習場面 ■ 「できる」学習場面)

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9
過程	つかむ・見通す	挑戦する・工夫する							生かす
課題の追究過程	試しのゲームをして、学習計画を立てよう。 パスがつかないとならぬ。作が難しくしめたな。	チームで協力しパスをつないでみんなが得点して楽しむゲームにしよう。 みんながフロアフットを楽しむにはどんなルールがよいか。 バックをまっすぐ速く蹴るにはどのように蹴ればよいか。 パスをつなぐためには、バックを保持していない人が、どのような場所に動けばよいか。 パスをつなぐためには、バックを保持している人が、どのような方向にパスを出せばよいか。 チームで協力して勝つためには、どんな作戦を立てればよいか。							フロアフット大会をしよう。 次で学習位置を移動したり工夫しながら楽しみたい。
学習内容	目標を決めよう。 動きの課題を向けて	とをし○とが工めみんなが夫するール楽	気○り○場○の○安○全○に	と○が○分○か○る○。	○守○り○と○重○なら○ない○位○置○を○も○ら○う○こ○と○が○で○き○る○。	○守○り○と○重○なら○ない○位○置○を○も○ら○う○こ○と○が○分○か○る○。	○守○り○と○重○なら○ない○位○置○を○も○ら○う○こ○と○が○分○か○る○。	○守○り○と○重○なら○ない○位○置○を○も○ら○う○こ○と○が○分○か○る○。	○勝○敗○を○受○け○入○れ○ながら○チ○ーム○で○協○力○し○て○進○ん○で○運○動○す○る○こ○と○が○で○き○る○。

5.4. 実践の実際

【4 / 9時：パスをもらうためにどのような位置へ動けばよいか分かる。(「分かる」学習場面)】

学習活動	実 際
1 準備運動 5分	前時までの課題：守りの後ろに味方がいてパスが出せない。
2 学習問題 5分	課題解決の必要感をもたせる働きかけ T： 前の時間に課題になっていたことは、具体的にどんな場面なのかな。(課題となる状況を具体的に把握させる発問) C： パスを出したいけど、味方が守りの真後ろにいるからパスを出せない。 C： 味方が守りとかぶっているんだよ。 T： それでは、誰が動けばそんな状況が解決できそうなかな。(解決の見通しをもたせる発問) C： バックをもっていない人 T： どんな学習問題になりますか。
3 挑戦 I ・話し合い 2分 ・タスクゲーム 5分×2	学習問題 パスをもらうために、バックをもっていない人は、どのような場所へ動けばよいだろうか。 タスクゲームを通して、パスが繋がった状況を各チームワークシートに書き込んで黒板に貼らせる。その際、課題となる動きは黒板に提示したままにしておく。
4 話し合い 7分	動きを比較させる働きかけ T： みんなが書いたワークシートを見て、気付いたことがあるかな。 C： 課題となる動きと比べてみると、どのチームも守りと重ならない場所へ動いているよ。
5 挑戦 II ・メインゲーム 5分×2	
6 整理運動 1分	
7 まとめ 5分	パスをもらうためには、バックをもっていない人が守りと重ならない場所へ動けばよい。

【5 / 9時：守りと重ならない位置へ動いてパスをもらうことができる。〔「できる」学習場面〕】	
学習活動	実 際
1 準備運動 5分	課題解決の必要感をもたせる働きかけ
2 学習問題 5分	T： 前の時間に分かったバックをもっていない人が、守りと重ならない場所へ動くことがゲームの中でできましたか。(分かったことができることにつながるか確認する発問) C： できることもある。
3 挑戦 I ・話し合い 2分 ・メインゲーム 5分×2	T： 守りと重ならない場所へ動くことができるという人は、手を挙げてみて。 C： 10名手を挙げる。(33名のクラスなので、約3分の1が挙手) T： なぜ、できなかったのかな。 C： チームの中で工夫する時間が必要です。
4 話し合い 5分	学習問題 守りと重ならない場所へ動いて、パスをもらうことができるようになるう。
5 挑戦 II ・メインゲーム 6分×2	できた要因を明らかにする働きかけ T： 守りと重ならない場所へ動けるようになってきたね。できるようになったのはどうしてかな。(できた要因を問う発問) C： 守りと重ならないためには、動き続けなといけないよ。 C： 守りもついてこようとするからね。 C： 守りをかわそうとすることも大切だと思う。 C： 仲間からの「右」とかいう声かけもよかったよ。
6 整理運動 1分	自分の変容を振り返らせる働きかけ T： この2時間で自分が成長したこととその理由を教えてくださいかな C： わたしは、守りと重ならない場所を見つけて動けるようになりました。その理由は、チームの友達が話し合いの時にアドバイスしてくれたりゲーム中に「右」とか言って声かけしてくれたりしてくれたからです。 T： そうなんだね。チームで協力できたから動けるようになったんだね。 C： ぼくは、班長だったけど初めのうちは自分だけ楽しめたらいいと思っていました。でもチームのみんなが楽しめることが大切だと思うようになりました。なぜなら、ゲームの前に円陣を組んだり、話し合ったことが成功したりするとなんか気持ちがよかったからです。
7 まとめ 振り返り 5分	T： 班長としての責任が出てきているね。すごいなあ。

5.5. 実践の考察

本実践の成果とその要因を以下にまとめる。

- 運動素材を「どんな課題を解決するのがおもしろいのか。」「子どもたちのどんな欲求を充足させるのか。」という視点で解釈することで、教師が、子どもたちが学習を進める上でぶつかる壁を想定しやすくなり、子どもたちに課題解決のおもしろさを味わわせたり、子どもたちの欲求を充足させたりすることにつながった。
- これまでは、1単位時間の中で「わかる学習場面」と「できる学習場面」を往還させようとしていたため、子どもたちの中には、十分に技能の高まりを実感できない場面が見られた。今回、「わかる学習場面」と「できる学習場面」の2時間で一つの学習内容を扱うことで、子どもたちが、技能の高まりをじっくりと実感することができるようになった。また、子どもたちに技能の高まりをじっくりと実感させることで、子どもたちが感じる次時への課題にもばらつきが

少なくなり子どもたちの思いや願いが発展していくことにつながった。なお、「わかる学習場面」と「できる学習場面」の2時間で一つの学習内容を扱う際には、子どもたちの6年間の学びを見通して各学年段階の重点指導事項を明確にしておく必要がある。

- これまでも問題意識の焦点化は図ってきたが、学習問題が「パスをつなぐためには、どのように動けばよいのだろうか。」など、まだ抽象的な表現となっていたため子どもたちの思考が拡散してしまうことがあった。そこで、学習問題を立てる際に、ゲーム領域では、どの人(ボール保持者なのか、ボールをもっていない人なのか)の動きを改善していけばよいのかを明確にすることで、これまでより子どもたちの問題意識を焦点化させることができ、問題意識を持続させることにつながった。

6. 今後の方向性

本実践研究の成果と課題を踏まえ、今後の方向性を以下のようにまとめる。

- 運動素材から運動のおもしろさや魅力を捉え直すことで、子どもたちに学ばせたい内容が焦点化された教材を設定することができた。今後は、学習内容がいかにかの時間や単元、学年に連続・発展させていくかを見据えたカリキュラムをつくる必要がある。
- 教師と子どもたちが体育の見方・考え方を働かせながら対話することを通して、本時で一番解決したい課題へと焦点化することができた。今後は、主に「わかる学習場面」を中心とした過程と主に「できる学習場面」を中心とした過程における問いの在り方や子ども同士のかかわり合いを充実させる手立てを検討する必要がある。

7. おわりに

平成29年3月の学習指導要領の改訂で示された「体育・保健の見方・考え方を働かせて、課題を発見し、その解決に向けた学習過程」や「主体的・対話的で深い学び」は、我々教師の普段の授業を改善する視点として今後大きく取り上げられることだろう。しかしながら、それらの授業改善の視点は、単なる学習の指導方法やスタイルのみに着眼するのではなく、「何のために体育を学ぶのか」といった教科教育の本質につながる視点を忘れてはならない。そして、子どもが体育授業の中で本当に運動のもつおもしろさに触れて、「とても楽しい」と評価し、「もっと運動してみたい」「これからも運動に向き合っていきたい」と感じてもらえる学習に導いていくためには、体育科の本質に根差し、子どもの発達の段階や欲求の充足の在り様を見極めた授業づくりが肝要となる。本実践では、このような視座に立ち、小学校段階における「体育の見方・考え方」やそれらを働かせた深い学びを実現させる学習指導の基本的な考え方を整理し、高学年において実践した報告である。今後は、さらに、当該学年(単元)で子どもが身に付けるべき内容についての整理はもちろんのこと、子どもの発達の段階や学習の状況に応じながら、それらを学ばせるために適した教材の開発、学びの状況に応じた教師の働きかけ、到達度評価のみならず個人やチームの伸びや成長を的確に評価する学習評価のあり方などを研究・実践する必要がある。

付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校平成25～29年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき、体育科教育において実践を進め、その成果をまとめたものである。

引用・参考文献

高橋健夫他編著(2002), 体育科教育学入門, 大修館書店

文部科学省(2008), 学習指導要領解説体育編, 東洋館出版

文部科学省(2010), 学校体育実技指導資料第8集 ゲーム及びボール運動, 東洋館出版

鈴木直樹・鈴木理, 土田了輔・廣瀬勝弘・松本大輔(2010), だれもがプレイの楽しさを味わうことのできるボール運動・球技の授業づくり, 教育出版

岩田靖(1994), 教材づくりの意義と方法, 高橋健夫編, 体育授業を創る, 大修館書店, pp.26-34

高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖(2002), 体育科教育学入門, 大修館書店, pp.73-80

鹿児島大学教育学部附属小学校(2017), 個の確立を目指す授業の創造ⅴ 各教科等の特質に応じた深い学びの実現, pp.71-78

熊本大学教育学部附属小学校(2016), 学習指導案 豊かな「対話」で広がる創造的な学び